

53 ワードロップ「瀉血について」

一八三五

藤倉 一郎

ワードロップはイギリス国王の侍医をしていた外科医であるが、一八三五年、今から一六〇年前に「Blood-letting」という一五〇ページほどの本をロンドンから出版している。この本の内容から、当時の治療法としての瀉血の実態が判断できるであろう。今日の私たちから見れば、なんと非常識なことと考える瀉血をこのように高く評価していたことは驚異であるが、私達自身も、今日の医療のなかに、どっぷりとつかっていると、正しいかどうかの判断はかなり難しい。現況を正しく判断するための一助に、瀉血が当時どのように評価されていたか、検討を加えてみることにする。

一八〇三 華岡青洲が全身麻酔で乳癌手術を行う

一八一七 杉田玄白死亡

一八一九 ラエンネックが聴診器を発明

一八二三 シーボルト長崎に到着

一八二五 フランスに瀉血のための蛭四〇〇〇万匹が輸入された

一八三二 コレラの大流行に瀉血と甘汞が治療主体であった

一八三五 ワードロップの「瀉血について」出版

一八三六 ルイの「瀉血の効果についての研究」の報告

一八三六 瀉血の有効性を指導したフランスのブルッセイ死亡

一八四六 モルトンがエーテル麻酔に成功

一八四九 シヨパン死亡

一八六〇 ゼンメルワイスの「産褥熱の原因と概念およびその予防法」の発行

「瀉血について」の内容

「瀉血について」出版一八三五年の時代背景

副題として「瀉血の治療効果の説明と治療基準」がつけ

いており、七章からなっている。

第一章 血液の働き、凝固、血清、血球についての見解

第二章 瀉血の有用性、静脈または動脈からの瀉血の差異、どの血管を使うか

第三章 適応、瀉血のときの脈の変化、心拍動の変化、失神の効果、瀉血量

第四章 失神の有効性、失神の危険性、蘇生方法、瀉血の反復

第五章 静脈切開、蛭による瀉血、Cupping

第六章 瀉血の効果、梅毒、癌、痛風、るいれき、肺結核への有効性

第七章 発熱への効果、発疹をともなう発熱、猩紅熱、天然痘、エリジペラス、急性炎症、鬱血、潰瘍など

全体で四五症例が提示され、結果が述べられている。

年齢は六才の小児から七〇才の老人までである。疾患別では頭痛一〇例、脳卒中五例、発熱五例のほかは腹痛、胸痛、浮腫、打撲、咳、呼吸困難、月経困難、化膿症、火傷、関節炎、喘息、肝炎、痛風、天然痘、腹膜炎、めま

いが各一—二例である。頭痛はおおくは蛭を用いて鼻腔、耳後などに二—四匹つけて毎日繰り返していた。瀉血は前腕肘静脈を切開し最高五〇オンス（一五〇〇ml）も瀉血して失神状態になるという。この失神状態が有効であつて、その有効性を論じている。右腕のしびれに対して総量一〇六オンス（三〇〇〇ml）もの多量瀉血で良くなったとしている。脳出血の患者では瀉血をしたが死亡した二例があげられている。

（一期会 藤倉病院）